

2/7/1
DIALOG(R)File 352:Derwent WPI
(c) 2002 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

004342552

WPI Acc No: 1985-169430/198528

Modified castor oil-contg. cosmetic compsn. - obtd. by modifying castor oil with yeast microorganism and mixing in cosmetic base

Patent Assignee: KANEBO LTD (KANE)

Number of Countries: 001 Number of Patents: 002

Patent Family:

Patent No	Kind	Date	Applicat No	Kind	Date	Week
JP 60100508	A	19850601	JP 83197838	A	19831105	198528 B
JP 87043970	B	19870917	JP 84197837	A	19840000	198741

Priority Applications (No Type Date): JP 83197838 A 19831105; JP 83176728 A 19830924; JP 83197837 A 19831105; JP 84197837 A 19840000

Patent Details:

Patent No	Kind	Lan Pg	Main IPC	Filing Notes
JP 60100508	A	6		

Abstract (Basic): JP 60100508 A

New cosmetic (I) is made by treating castor oil using a microbial strain (II), sepg. and collecting the treated castor oil, and mixing this in a cosmetic base. (II) belongs to an yeast and has the ability to produce gamma-decalactone using castor oil as a substrate. (II) may belong to the genus *Saccharomyces*, *Pichia*, *Hansenula* or *Candida*.

(II) is e.g. *Saccharomyces cervisiae* AHU 3034, *Saccharomyces chev-alieri* IFO 0210, *Pichia farinosa* IFO 0459, *Hansenula anomala* OUT 6316, or *Candida utilis* IFO 0626. The modified castor oil is used in an amt. of 0.1-60, preferably 1-50 wt.% to the total amt. of (I).

USE/ADVANTAGE - (I) has excellent aroma, taste, spreadability, smoothness and touch to the skin. It can be used e.g. in the form of a lip colour, a skin cream or a hair lotion.

Derwent Class: D16; D21

International Patent Class (Additional): A61K-007/00; C12P-017/02; C12R-001/85

C 49-1204
18
ricinoleic acid in
Castor oil

⑪ 公開特許公報 (A) 昭60-100508

⑫ Int. Cl.

A 61 K 7/00
 C 12 P 17/02
 //C 12 P 17/02
 C 12 R 1:85
 (C 12 P 17/02
 C 12 R 1:645)
 (C 12 P 17/02
 C 12 R 1:78)
 (C 12 P 17/02
 C 12 R 1:72)

⑬ 識別記号

⑭ 厅内整理番号

7306-4C
6971-4B

⑮ 公開 昭和60年(1985)6月4日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

⑯ 発明の名称 化粧料

⑰ 特 願 昭59-197837
 ⑱ 出 願 昭58(1983)9月24日
 ⑲ 特 願 昭58-176728の分割

⑳ 発明者 奥山 源一郎 小田原市夷町5丁目12番13号
 ㉑ 発明者 佐藤 昇正 小田原市飯泉1037番地の3
 ㉒ 発明者 大枝 一郎 泰野市沢沢1264番地の5
 ㉓ 発明者 下山 佑 南足柄市駒形新宿13番地の1
 ㉔ 出願人 鎌訪株式会社 東京都墨田区墨田5丁目17番4号

明細書

1. 発明の名称

化粧料

2. 特許請求の範囲

(1) 腺母類に属しあつヒマシ油を基質としてアーデカラクトン生産能を有する菌株を用いてヒマシ油を処理し、処理したヒマシ油を分離、採取して、化粧料基剤に配合してなる化粧料。
 (2) 前記の腺母類に属しあつヒマシ油を基質としてアーデカラクトン生産能を有する菌株が、サッカロミセス (Saccharomyces) 菌、ピキア (Pichia) 菌、ハンゼヌラ (Hansenura) 菌、キヤンディダ (Candida) 菌に関する菌株である。
 特許請求の範囲第(1)項記載の化粧料。

3. 発明の詳細な説明

(産業の利用分野)

本発明は、香氣、物性などの品質が改質されたヒマシ油を配合した化粧料に関する。更に詳しく述べて、匂い(香氣)、味、伸び、滑らかさ、皮膚に対する感触等に優れた化粧料に関する。

(従来の技術)

従来、ヒマシ油は、化粧料用原料として汎用されているが、特有の臭いとエグ味を有し、また経日により酸化、加水分解を生起して好ましくない臭気を生じる欠点がある。

それ故、ローリ、スティック型ほほ紅、整髪料など、ヒマシ油を多量配合する化粧料においても、ヒマシ油特有の不快臭をマスキングするために、高価な香料を比較的多量使用しなければならなかった。

更にヒマシ油は、構成脂肪酸の90%を不飽和脂肪酸であるリシノール酸が占め、通常の植物油脂と比較して、特異的粘着性が大きく、皮膚に対して重いグリース的な感触を与えるという欠点がある。

(発明が解決しようとする問題点)

本発明者は、上述の如き従来のヒマシ油の欠点を改良すべく幾度研究した結果、腺母類に属しあつヒマシ油を基質としてアーデカラクトン生産能を有する菌株を用いてヒマシ油を処理すること

により、ヒマシ油特有の不快臭が除去されると共に、極めて嗜好性の高い丸味のある甘く、酸部とした主としてアーテカラクトンに起因するミルククリーム様香気が付与され、そして、ヒマシ油の見かけの粘性には何ら変化を認めないにもかかわらず、人の皮膚に塗布した場合に感じるヒマシ油特有のねばつく様な感じがなくなり、極めて滑沢性の良いさらさらした皮膚感触を与える。化粧料原料としてのヒマシ油の嗜好適性が著しく改善されることを見出し本発明を完成した。

本発明の目的は、匂い(香気)、味、伸び、滑らかさ、皮膚に対する感触等に優れた化粧料を提供することにある。

(問題点を解決するための手段)

すなわち、本発明は、酵母類に關しつつヒマシ油を基質としてアーテカラクトン生産能を有する酵母を用いてヒマシ油を処理し、処理したヒマシ油を分離、採取して、化粧料基剤に配合してなる化粧料である。

本発明の前記処理に用いられるヒマシ油は、例

えば、日本農林規格、植物油脂の項に記載のひまし油、精製ひまし油、及び脱臭ひまし油、及び第10改正日本薬局方記載のヒマシ油、即ちトウゴマ [*Eicinus communis* Linne (Euphorbiaceae)]の種子を圧搾して得た脂肪油を利用することができる。

また本発明で利用することのできる酵母類としては、例えばサッカロミセス属に属する *Saccharomyces cerevisiae* ATU 3034 *Saccharomyces chevalieri* IFO 0210、ビキア属に属する *Pichia farinosa* IFO 0459、ハンゼヌラ属に属する *Hansenura anomala* OUT 6816、キャンディダ属に属する *Candida utilis* IFO 0626、等ヒマシ油に作用しアーテカラクトン生産能を有する菌株をあげる事が出来る。

本発明におけるヒマシ油の処理の好ましい一実施形態を例示すれば、前記例示した如き酵母類、例えば *Saccharomyces Cerviciae* に属するパン酵母を例えれば、pH 約4～約7の無機塩培地もしくは、ポテトキストロース培地等の天然培地に接

触し、約10℃～約50℃、好ましくは約20℃～約40℃にて、約12時間～約72時間振盪もしくは搅拌条件下に培養を行う。次いで得られた培養液1重量部に対してヒマシ油を約0.1～約2重量部を加え、例えば約10℃～約50℃、好ましくは約20℃～約40℃にて、約2時間～約72時間静置もしくは振盪或いは搅拌条件下に培養処理する。

又は、上記実施形態における酵母の前培養工程を省略し、培地とヒマシ油の混合物に乾燥酵母や圧搾酵母を添加して混合し、均一とした後、上記と同様の条件によって静置もしくは振盪或いは搅拌条件下に培養処理することもできる。

更に上記の如き培養処理の際、所望により例えば界面活性剤などの乳化剤を添加することもできるし、あるいは脂肪分解酵素を添加することもできる。

上記培養処理を行ったヒマシ油は、所望により適宜分離手段、例えばデカンテーション、遠心分離などにより、酵母処理液から分離し、更に必要

により、芒硝、シリカゲル、粉末戸紙などの任意の脱水剤を添加して脱水処理するか、或いは真空乾燥など任意の手段を用いて脱水処理することにより、保存安定性が良く、著しく品質の改善された本発明のヒマシ油を得ることができる。

前記の如くして得られた品質の改良されたヒマシ油は、原料ヒマシ油の不快臭が完全に除去され、強く持続性のある極めて嗜好性の高い甘いミルククリーム様乃至熟成感のある芳香を有し、更に加えてさらりとした口当たり及び皮膚感触を与える頭著に改良された好ましい特性を有する。

上記の如きヒマシ油を基質としてアーテカラクトン生産能を有する酵母類のヒマシ油に対する作用機構は必ずしも明らかではないが、該酵母類が産生する酵素その他の生産物が遊離リシノール酸に作用し、不飽和結合の転移、加水分解及び分子内脱水などの諸反応を惹起し、リシノール酸より低分子の飽和アルコール類、メチルプロピルケトン、メチルアミルケトン、メチルヘキシルケトン、メチルヘプチルケトン等のケトン類をはじめとし

特開昭60-100508(3)

物質と均一に混合(溶融)したかたちで、または当該化粧料の基剤(ベース)の中に添加。配合する等、通常のヒマシ油と同様に適用される。

(実施例)

以下、実施例により本発明を更に詳細に説明する。

尚、実施例に示した%とは重量%、部とは重量部を意味する。

実施例1

容量500mlのフラスコに滅菌生理食塩水50ml及び*Baccharomyces cerevisiae*である市販パン酵母(ニットーイースト、オリエンタル酵母)10gを加えて分散し、これに精製ヒマシ油50gを添加し80℃にて120往復/分の条件で48時間振盪培養した。培養処理後デカンテーションにより、油層を採取し該油層に芒硝約5gを添加して脱水処理し、沪紙沪過して好ましいミルククリーム様香氣を有し、流動性の良いヒマシ油(本発明品1)45gを得た。

また、このヒマシ油は、さらりとした良好な肌

て、特異的に香料のアーテカラクトンを生成する結果、ヒマシ油特有の不快臭が消え、強くて持続性があり、極めて嗜好性の高い丸味のある甘く、酸味としたミルククリーム様香氣が賦与され、同時に、ヒマシ油特有のべたつく様な皮膚感触を与える粘性が改良されて、さらりとした肌ざわりを実現したものと推定される。

上記の如くして得られた改質ヒマシ油は、例えば口紅(リップスティック)、スキンクリーム、リップクリーム、スキンローション、ヘアクリーム、ヘアローション、ボマード、チック等の様々な多くの皮膚化粧料、メイクアップ化粧料、頭髪化粧料等の化粧料において、従来の通常のヒマシ油と同様に応用することができる。その使用量(配合量)は、化粧料の種類によって異なるけれども、通常当該化粧料の処方成分の全量重量を基準として、0.1~6.0重量%(好ましくは1~50重量%)の範囲内である。

化粧料の調製に際しては、例えば、後記実施例に記載の如く改質ヒマシ油と化粧料用の他の油性

ざわり(感触)を与え、べとつくようなわるい感触を与えないかつ化粧料原料としての嗜好適性を満足せしめ得るものであった。

尚、測定した本発明の改質ヒマシ油(本発明品1)の特性値と、上記の処理に使用した未処理(通常の化粧料用)のヒマシ油の特性値(括弧内の数値)の主要部を挙げて比較すると、比重(20℃)は0.9680(0.9616)、屈折率(20℃)は1.4788(1.4795)、エステル価は18.2.0(18.4.0)、ケン化価は18.8.2(18.4.9)で、これらは改質品の方がやや低い値を示し、酸価は1.2(0.6)、ヨウ素価は8.6.2(8.4.2)、水酸基価17.7.5(15.6.5)、遊離脂肪酸は0.58%(0.15%)で、改質品は何れも可なり高くかつ増加した。特に、遊離脂肪酸の脂肪酸組成はリシノレイン酸は8.4.8.9%(5.8.1.9%)、サノール酸は17.7.7%(8.9.4%)、アーテカラクトンは0.7.0%(0%)であって、本発明の前記処理によるリシノレイン酸の著しい減少、リノール酸(ビタミンF)の著しい増加、及び芳香を発生す

るアーテカラクトンの生成、更に不快臭を発生するヘプタナールの消滅等の特異な作用効果に注目される。

前記の如くして得られた本発明品1の改質ヒマシ油44.8部、固体パラフィン8部、キャンドリラロウ9部、ミツロウ5部、カルナウバロウ5部、白色ワセリン11部、及びイソプロピルミリステート10.4部を混合し、80℃に加熱し、溶融して均一混合溶融物となし、これに色番の赤色8号アルミニウムレーキを4部と黄色アルミニウムレーキ4号1部と黄色5号アルミニウムレーキ1.8部の均一混合物を添加して、ローターで充分混練した。次にこの混練物を口紅成型用の型容器の中に流し込んだ後冷却し、離型して口紅(リップスティック)(本発明品1のヒマシ油を配合した口紅)を得た。

この口紅の実用テスト(官能テスト)を女性50人によって行なった結果、後記の評価方法(最高点最低1点とした評価基準)から得られた官能評価点(50人の平均点)は、匂い(香気性)が

特開昭60-100508(4)

4.5点、味(味覚)が4.8点、伸び(伸び性)が4.1点、滑らかさ4.8点、感触(肌ざわり:べたつき感の有無)が4.4点であって、本発明品版1のヒマシ油は口紅として困ましい嗜好特性を充分に表現付与せしめられた口紅を提供し得ることを確認した。

また比較のために、前記の本発明品版1の改質ヒマシ油の代りに、実施例1で使用した未処理のヒマシ油を使用する他は、同様に行なった。

得られた口紅の官能評価点は、匂いが2.2点、味が2.0点、伸びが3.6点、滑らかさ4.0点、感触8.1点であって、前記の本発明品版1のヒマシ油を配合した口紅に比較すると、その特性、効果に顕著な差異があることを確認した。

○化粧料の実用(官能)テストと評価方法

匂い、味、伸び、滑らかさ、または感触に関する、良いと答えた人を6点、普通と答えた人を3点、わるいと答えた人を1点とし、パネラー50人の平均値を官能評価点とした。以下同じ。

実施例2

溶液を2%接種し、80℃にて24時間培養した。次いでこの培養液に精製ヒマシ油50gを加え、80℃にて120往復/分の条件で48時間振盪培養し、培養処理後、実施例1と同様の後処理を行って香味、粘性共に改善されたヒマシ油(本発明品版3)4.8gを得た。

実施例1で得られた本発明の改質ヒマシ油(本発明品版1)の代りに、前記の改質ヒマシ油(本発明品版3)を使用する他は、実施例1と同様に行なった。得られた口紅は、官能評価点において匂いが4.5点、味が4.8点、伸びが4.0点、滑らかさが4.1点、感触(べたつき感の有無)が4.4点で、品質の極めて良好なものであった。

実施例4

容量2Lのミニジャーに滅菌生理食塩水1L及び市販パン酵母(ニットーイースト・オリエンタル酵母製)、200gを加えて分散させ、更にヒマシ油1gを加えて、600rpm, 0.1vvm 80℃にて24時間培養処理し、処理後、油層を分離して粉末ガムを加えて押出し、更に100mmHg、

実施例1において、生理食塩水50mLに代えて、(NH₄)₂HPO₄ 2%、K₂HPO₄ 0.2%、MgSO₄·7H₂O 0.08%及び酵母エキス 0.2%からなるpH 7.0の無機塩培地を50mLを使用したほかは、全て同一条件によってヒマシ油を処理し、実施例1と同様に品質の改善されたヒマシ油(本発明品版2)4.7gを得た。

実施例1で得られた本発明の改質ヒマシ油(本発明品版1)の代りに、前記の改質ヒマシ油(本発明品版2)を使用する他は、前記実施例1と同様に行なった。得られた口紅は、官能評価点において匂いが4.4点、味が4.8点、伸びが4.1点、滑らかさが4.0点、感触(べたつき感の有無)が4.4点で、品質の極めて良好なものであった。

実施例3

500mL容の坂口フラスコに、グルコース2%、ペプトン0.5%、酵母エキス0.2%、KH₂PO₄ 0.1%及びMgSO₄·7H₂O 0.05%からなるpH 5.7に調整した無機塩培地50mLを採り、これに *Saccharomyces cerevisiae* ABU 8034 前培

80℃にて減圧脱水し、ミルク様の甘い香りを有する延粘性の改質ヒマシ油(本発明品版5)950gを得た。

実施例1で得られた本発明の改質ヒマシ油(本発明品版1)の代りに、前記の改質ヒマシ油(本発明品版5)を使用する他は、実施例1と同様に行なった。得られた口紅は官能評価点において匂いが4.5点、味が4.2点、伸びが4.1点、滑らかさが4.1点、感触(べたつき感の有無)4.8点で、品質の極めて良好なものであった。

実施例5

グリセリルモノオレート2部、ジグリセリルモノオレート8部、流动パラフィン20部、オクチルドデシルミリストート5部、ミツロウ2部及び実施例1で得られた改質ヒマシ油(本発明品版1)5部を80℃にて搅拌下、均一に混合、溶解し、この混合物に、マルチトール5部を精製水58部に溶解した水溶液(80℃)を搅拌下に添加し、更に80℃にて5分間ホモミキサーで搅拌して乳化した後、80℃まで冷却してスキンクリームを

特開昭60-100508(5)

実施例 1 の改質ヒマシ油(本発明品 No.1)の代りに、前記の改質ヒマシ油(本発明品 No.8)を使用する他は、実施例 5 と同様に行なった。得られたスキンクリームは、官能評価点において、匂いが 4.8 点、味が 4.1 点、伸びが 8.9 点、滑らかさが 4.2 点、感触(べたつき感の有無)が 4.1 点で、品質の極めて良好なものであった。

このスキンクリームの実用テスト(官能テスト)を実施例 1 に記載の如く行なった結果、このスキンクリームは官能評価点において、匂いが 4.8 点、味が 4.1 点、伸びが 8.9 点、滑らかさが 4.2 点、感触(べたつき感の有無)が 4.1 点で、品質の極めて良好なものであった。

比較のために、実施例 1 で得られた改質ヒマシ油(本発明品 No.1)の代りに、実施例 1 で使用した未処理のヒマシ油を使用する他は前記と同様に行なった。得られた比較(対照)スキンクリームの官能評価点は、匂いが 2.7 点、味が 2.2 点、伸びが 8.2 点、滑らかさが 8.0 点、感触(べたつき感の有無)が 8.8 点であった。

実施例 6

実施例 8 の *Saccharomyces cerevisiae* AHU 8084 の代りに、*Hansenura anomala* OUT 6816 を使用する他は、実施例 8 と同様にして香味、感触の改良されたヒマシ油(本発明品 No.8) 4.6 g を得た。

いて匂いが 4.4 点、味が 4.1 点、伸びが 4.2 点、滑らかさが 4.0 点、感触(べたつき感の有無)は 4.6 点で、品質の極めて良好なものであった。

比較のために、前記の改質ヒマシ油(本発明品 No.8)の代りに、実施例 1 で使用した未処理のヒマシ油を使用する他は、前記と同様に行なった。得られた比較(対照)のリップクリームの官能評価点は、匂いが 2.8 点、味が 2.1 点、伸びが 8.1 点、滑らかさが 8.1 点、感触(べたつき感の有無)が 8.2 点であった。

実施例 8

実施例 8 の *Saccharomyces cerevisiae* AHU 8084 の代りに、*Pichia farinosa* IFO 0459 を使用する他は、実施例 8 と同様にして香味感触の改良されたヒマシ油(本発明品 No.7)を 4.6 g 得た。

実施例 7 で得られた改質ヒマシ油(本発明品 No.6)の代りに、前記の改質ヒマシ油(本発明品 No.7)を使用する他は、実施例 7 と同様に行なった。得られたリップクリームは官能評価点において、

実施例 7

実施例 8 の *Saccharomyces cerevisiae* AHU 8084 の代りに、*Candida Utilis* IFO 0626 を使用する他は、実施例 8 と同様にして香味、感触の改良されたヒマシ油(本発明品 No.6) 4.6 g を得た。

前記の改質ヒマシ油(本発明品 No.6) 4.0 部、キャンデリラロウ 1.5 部、カルナウパロウ 3 部、白色ワセリン 5 部及びトリカプリリン酸グリセリン 3.6 部、80℃にて均一に混合溶解した後、二酸化チタン 1 部を加えてローラーにかけて再び溶解して型容器に流し込み冷却成型してリップクリームを得た。このリップクリームは官能評価点にお

いて匂いが 4.4 点、味が 4.1 点、伸びが 4.1 点、滑らかさが 4.0 点、感触(べたつき感の有無)が 4.4 点で品質の極めて良好なものであった。

実施例 9

実施例 1 で得られた改質ヒマシ油(本発明品 No.1) 1.5 部、プロピレングリコール 5 部、エチルアルコール 1.0 部、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油 0.5 部及び精製水 8.0 部を搅拌下に均一に混合し溶解し、沪過してスキンローションを得た。このスキンローションは、官能評価点において、匂いが 4.1 点、味が 8.8 点、伸びが 4.1 点、滑らかさが 8.8 点、感触(べたつき感の有無)が 8.8 点で、品質の極めて良好なものであった。

比較のために、実施例 1 で得られた改質ヒマシ油(本発明品 No.1)の代りに、実施例 1 で使用した未処理のヒマシ油を使用する他は、前記と同様に行なった。得られた比較(対照)のスキンローションは、官能評価点において、匂いが 8.2 点、味が 2.9 点、伸びが 8.8 点、滑らかさが 8.2 点、感触(べたつき感の有無)が 2.7 点であった。

実施例10

実施例1の培養組成に加えてリバーゼMAP-10（商品名、天野製薬製）0.01g（ヒマシ油に対して0.02%）を添加し、80℃にて120往復／分の条件で48時間振盪培養し、実施例1に従って処理し、同品質の改質ヒマシ油（本発明品No.4）4.6gを得た。

実施例1で得られた改質ヒマシ油（本発明品No.1）の代りに、前記の改質ヒマシ油（本発明品No.4）を使用する他は実施例10と同様に行なった。得られたスキンローションは、官能評価点において、匂いが4.1点、味が8.8点、伸びが8.9点、滑めらかさが8.8点、感触べたつき感の有無）が8.9点で、品質の極めて良好なものであった。

特許出願人 錦紡株式会社

特許法第17条の2の規定による補正の掲載

昭和 59 年特許願第 197837 号(特開 昭 60-100508 号, 昭和 60 年 6 月 4 日 発行 公開特許公報 60-1006 号掲載)については特許法第17条の2の規定による補正があつたので下記のとおり掲載する。 (2)

Int. C.I.	識別記号	庁内整理番号
A61K 7/00		7306-4C
C12P 17/02		7732-4B
//(C12P 17/02		
C12R 1:85)		6760-4B
(C12P 17/02		6760-4B
C12R 1:645)		6760-4B
(C12P 17/02		6760-4B
C12R 1:78)		6760-4B
(C12P 17/02		6760-4B
C12R 1:72)		6760-4B

6. 補正の内容

- (1) 明細書、第1頁に記載の「特許請求の範囲」の欄を別紙のとおり補正します。
- (2) 明細書、第3頁第15行～同頁第19行に記載の「本発明は、……中略……化粧料である。」を、「本発明は、酵母類に属し且つヒマシ油を基質としてテーデカラクトン生産能を有する菌株を、ヒマシ油を基質とする培地中で培養し、培養処理したヒマシ油を分離採取して、化粧料基剤に配合してなる化粧料である。」に補正します。
- (3) 明細書、第8頁の第1-8行～第1-9行に記載の、「酵母類に属し……中略……化粧料である。」を、「前記の特許請求の範囲の第(1)項の如く補正せよ。」
- (4) 明細書、第4頁第9行に記載の「8084 Saccharo-」を、「8084, Saccharo-」に補正します。
- (5) 明細書、第6頁第18行に記載の「菌生館」を、「生産館」に補正します。

手 続 楽 正 書 (自署)

昭和 61 年 8 月 27 日

特許庁長官 黒田 明雄 殿

1. 事件の表示

昭和 59 年特許願第 197837 号

2. 発明の名称

化粧料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都墨田区墨田五丁目 17 番 4 号

名称 (095) 編 紡 株 式 会 社

代表者 岡本 道

連絡先

〒534 大阪市都島区友渕町 1 丁目 5 番 90 号

編 紡 株 式 会 社 特許部

電話 (06) 921-1251

4. 補正により増加する発明の数 なし

5. 補正の対象

明細書の「特許請求の範囲」の欄並びに

「発明の詳細な説明」の欄

61.8.29

出願第 2 件

別紙

特許請求の範囲

- (1) 酵母類に属し且つヒマシ油を基質としてテーデカラクトン生産能を有する菌株を、ヒマシ油を基質とする培地中で培養し、培養処理したヒマシ油を分離採取して、化粧料基剤に配合してなる化粧料。

- (2) 前記の酵母類に属し且つヒマシ油を基質としてテーデカラクトン生産能を有する菌株が、サツカロミセス (Saccharomyces) 属、ピキア (Pichia) 属、ハンゼヌラ (Hansenura) 属、及びキヤンディダ (Candida) 属からなる酵より選択された酵母類に属する菌株である、特許請求の範囲第(1)項記載の化粧料。